

第三十一表 吾妻山（福島縣）噴火

年月日	同上（西曆）	記事
明治二十六年五月十九日	一八九三年五月十九日	<p>吾妻山ハ一大噴火孔彙ノ總稱ニシテ舊噴孔ノ巖然トシテ存スルモノヲ桶沼、吾妻富士、五色沼、鎌沼トス、有史時代ニ於ケル破裂ノ歴史ハ審ナラザルモ今ヨリ七八十年前ニ噴出セルコトアリ、明治初年ニ至ル迄ハ多少蒸汽ヲ噴出セリト云フ、此ノ噴孔ハ大穴ト稱シ一切經山ノ南腹ニアリテ殆ド正圓形ヲ爲シ直徑約百米ニシテ、深サ約六十米ナリ、明治二十六年ノ破裂口ハ此ノ大穴ヨリ西ニ一山脊ヲ隔ツル所ニ生ジタリ。<small>（東洋學藝雜誌第四百十號）</small></p> <p>五月十九日午前十一時三十分爆發ス、福島町、猪苗代町等ヨリ望見セルニ噴煙ハ直上ニ昇騰スルコト約二「キロメートル」ニシテ其下半ハ極メテ黑カリシト云フ、當日ハ天氣靜穩快晴ナリシガ灰ハ主トシテ南々東ノ方向ニ降下シテ數里ノ遠キニ及ビ、安達太郎山ノ積雪ハ降灰ノ爲メニ鼠色ニ變ジタリ」今回破裂セルハ大巖山南側中腹ニシテ南々東ヨリ北々西ニ走レル燕澤中ニアリテ數多ノ大小噴火口ヲ生ジ鬱積セル蒸汽ハ此ノ處ニテ山側ヲ爆破シテ土石ヲ四邊ニ飛散セシメタリ、而シテ土灰ガ多量ノ水蒸汽ト混ゼルニ由リ多少泥濘トナリテ噴孔ノ四邊ニ堆積セルガ、噴孔ノ傍ニテ泥土ハ最厚ニシテ略ボ三米突アリ、其ヨリ次第ニ減少セリ、沼之</p>

年月日

同上 (西曆)

記事

明治二十六年六月四日

一八九三<sup>年</sup> 六月<sup>月</sup> 四<sup>日</sup>

平ノ一半モ泥土ニ覆ハレタリ、且ツ一切經山ノ頂點ニ近キ邊マデ泥石飛散シアルヲ以テ土石ハ三四百米モ高ク空中ニ拋射セラレタルヲ知レリ。噴出セル泥土降灰ノ容積ハ概略五十萬立方米ナリ。沼之平及ビ噴孔ノ四邊ニハ拋射セラレタル岩塊ガ地面ニ落下シテ土中ニ突キ入レル爲ニ生ゼル圓形ノ孔數多アリ皆ナ小ニシテ直徑七八尺ヲ超ユルハ稀ナリキ」破裂後二三日ヲ經テ實見セル所ニテハ盛ニ蒸汽ヲ噴出シテ「キロメートル」モ空中ニ上騰セシメタリ、噴口ノ主要ナルモノ五個アリ、其他小ナルモノハ許多アリキ。

五月十九日破裂以來ハ前記ノ有様ニテ格別ノ爆發ナク次第ニ鎮靜ニ歸スル如クナリシガ同月三十一日頃ヨリ屢々夥シク灰ヲ噴出シ殊ニ六月四日午前四時十分頃同日午後五時頃及五日午前六時三分頃ニハ激シク爆發シテ細微ナル灰泥ハ風向ニ從ヒ福島其他ノ場所ニマデ降下セリ、就中四日午前ノ爆發ハ最モ強ク、其勢力ハ五月十九日最初ノ破裂ヨリモ一層大ニシテ當時福島ニテハ遠雷ノ如キ鳴響ヲ聞キ戸障子ノ動搖スルコト三十秒ニ及ベリ」今回ハ新ニ破裂口ヲ生ゼルニ非ズシテ、從前ノ噴孔ヨリ強ク爆發セシモノナリ、故ニ土砂ノ管ヲ堆積セルヲ爆破シテ泥土ヲ噴出セルコト少ナク、首トシテ岩塊ヲ飛散セシメタルナリ。降灰區域ハ五月十九日ノ破裂ノトキニ比スレバ一層廣ク灰量モ數倍ノ多キニ達シタリ、噴口ヨリ十五六町ノ所ニ於テモ二三分ノ厚サニ積リテ草木ノ葉ハ爲ニ凋枯シ

明治二十七年三月十六日

一八九四年三月十六日

同 四月五日

一八九四年四月五日

積灰ノ甚ダシカラザル微温湯近傍ニテモ葉ノ尖端ノ黑色ニ變ジテ酸類ニ焦ゲタルガ如ク見ユルモノ多カリキ」噴孔ノ四近特ニ東、南、西ノ三方ニハ降石ノ爲メニ生ゼル圓錐狀ノ小孔夥ダシク、其最モ遠キハ噴孔ヨリ殆ド十五町ノ距離ニ達シタリ、孔ノ大ナルハ直徑七尺ニ及ベリ、石塊ノ抛射セラレタル最大ノ高サハ約一基米ナリシガ如シ。噴出セル石塊ノ最大ナルハ噴孔ノ邊ニアリテ長サ約四米アリキ」六月四日午前四時ノ爆發後ニ於テハ同七日午後一時頃ノ爆發最モ強ク其勢力ハ前者ト伯仲セシガ、爾後ハ次第ニ鎮靜ニ歸シタリ。七日午前十時頃ノ噴出ノトキ噴孔附近ニテ調査ニ從事セル農商務技師理學士三浦宗二郎、同技手西山惣吉ノ兩氏ハ不幸ニモ降石ノ爲ニ負傷シ遂ニ絶命セラレタリ。(上同)

數日前降雨アリテノ後ハ日々少シヅ、ノ鳴動アリ特ニ十六日ハ轟然タル響地底ヲ震ハシメタル鳴動アリ山巔一面ニ雲ヲ蔽ヒ其ノ上ニ黑煙ノ立上ルヲ見タリト云フ。(明治二十七年三月二十日自由新聞)

信夫郡水保村一切經山本月五日正午十二時鳴動シ同日午後三時三十分再ビ鳴動、此時黑煙昇騰シ近傍村落ニ降灰アリ、同七時三十分ニ至リ一層強キ鳴動ト共ニ人家ニ震動ヲ感シ水保佐倉兩村ノ如キハ降灰地上ニ堆積シ荒川筋ハ水源一切經山々谷ニアルヲ以テ流水混濁ヲ來タシ爲ニ下流ノ諸川ハ濁水トナレリ。(福島縣廳報告)

五日夜八時頃ヨリ福島縣福島町地方ニ降灰シ九時頃最モ甚ダシカリキ。

(明治二十七年四月十日)  
 (二日東京日々新聞)

年月日

同上 (西曆)

記事

明治二十七年四月十二日

一八九四年四月十二日

同 二十八年三月八日

一八九五年三月八日

午前九時頃ヨリ雲ノ如クニ噴煙シ、同十時頃南置賜郡及米澤市邊ニ降灰シ、午後二時頃ニ至リテ止ム。(明治二十七年四月十五日山形日報)

八日午後七時三十二分鳴動本所据付ノ檢震器ニ微動ヲ呈シ次ギテ同九時四十分ヨリ一分十五秒間鳴動此時黑煙昇騰シ微量ノ降灰アリ。九日午前四時二十分鳴動、此時モ少コシク降灰アリ、同日午前五時四十二分四秒ヨリ二十秒鳴動ス、午後六時五十四分五十五秒(此時モ黑煙騰ル)同七時四十四分二十四秒ヨリ五十六秒間、同八時四十五分五秒、同九時五十八分二十秒、同十時二十七分七秒ニモ鳴動アリ。十日午前零時一分三十三秒、同一時三十四分三十五秒、同一時四十分四十六秒、同三時七分三十六秒ヨリ五十四秒間、同七時三十五分ニモ鳴動アリタリ。(福島測候所報告)

十日夜モ鳴動アリ、十一日朝モ福島町近傍ニ降灰セリ。(明治二十八年三月十二日福島新聞) 一切經山ハ往年爆發以來常ニ多少ノ噴煙アリ、且ツ時々輕微ノ震動ヲ感ジタルコト尠ナカラザリシガ、本月八日午前七時三十二分頃鳴動ヲ發シ同日午後九時四十分頃ニ至リ鳴動甚シク震動殆ド一分間餘、此時黑煙昇騰シ多少ノ降灰アリ、爾後噴煙夥多ナリキ。(福島縣報告)

同 五月十九日 一八五九 五一九 信夫郡西在ニテハ十八日午前六時十五分噴灰ノ降下アリ、十九日午前五時少コシク鳴動ヲ聞キ間モナク砂灰ヲ降下スルコト一昨年始メテ噴火セシトキヨリモ甚ダシク、水保村土船ノ西部、佐倉村佐原ノ東部等桑園ニ害ヲ蒙ムレルコト多シ。(明治二十八年五月廿四日福島新聞)

同

七月七日

一八九五年七月七日

吾妻山ハ六日午後五時頃ヨリ常ニナク盛ニ黒煙ヲ噴出シ夜ニ入りテハ少  
コシク灰ヲ降ラセタルガ、七日午前八時三十分頃ニ至ルヤ大鳴動ヲ發シ  
テ黒煙ヲ噴出シ、約二十分ヲ經テ降灰セシガ、午後ニ至リテ止ミタリ。

(明治二十八年七月九日福島新聞)

伊達郡ノ北部ニモ降灰アリ保原町ノ如キハ福島ヨリモ多量ニ堆積セリ、  
松川、二本松等ハ鳴動ヲ聞キシノミニテ降灰ナシ。(明治二十八年七月十日東京朝日新聞)

同

七月十七日

一八九五年七月十七日

午後六時頃福島ニテハ雨ニ灰ヲ混ジテ降下セシガ暫時ニシテ止ミタリ。  
(明治二十八年七月十九日福島新聞)

同

九月十三日

一八九五年九月十三日

午前八時二分頃黒煙ヲ噴出シ三十分ヲ經テ降灰セリ、一時間ノ後ニ再ビ  
黒煙ヲ噴出セリ。(明治二十八年九月十四日福島新聞) 相馬郡原之町附近ニ於テ頻リニ降灰セ  
リ。(同十五日福島民報)

同

九月十九日

一八九五年九月十九日

吾妻山ハ本月五日午後零時七分、同八日午後七時二分同十二日午前零時  
二十分小鳴動アリシガ、十三日午前八時二十五分強キ鳴動アリ黒煙ハ山  
高ノ約二倍ノ高サヨリ東方ニ折レ、同時五十分ヨリ七分間本所近邊ニ少  
量ノ灰ヲ降ラセリ。午前九時五十六分再ビ小噴出アリ。(福島測候所報告)

信夫郡庭坂村高湯及微温湯地方ハ十八日以來二三回ノ微震アリ、十九日  
午前四時頃ニ至リ一切經山ハ少シク鳴動シ且同地方ニ降灰アリ堆積スル  
コト三分位、木葉枯凋セリ、山麓佐倉村地方ハ風位ニヨリ桑園降灰ニ染  
ムモノアリシモ格別被害ナシ。(福島縣報告)

明治二十九年九月五日

一八九六年九月五日

五日午後〇時七分、八日午後七時二分、十二日午前零時二十分、小鳴動ア

年月日

同上 (西曆)

記事

リ、十三日午前八時二十五分ニ至リ強キ鳴動ト共ニ黒煙噴騰シ該山二倍ノ高サヨリ一折シテ東方ニ向ヒテ進行シ同時五分ヨリ七分間測候所附近ニ少量ノ灰ヲ降ラシタリ。午前九時五十六分更ニ小噴出アリ。(福島測候所報告)

第三十二表 安達太郎山噴火

(岳山、沼尻山、或ハ硫黃山下モ稱ス)

年月日

同上 (西曆)

記事

明治三十二年八月二十四日

一八九九年八月二十四日

昨年末ニ至ル迄ハ噴氣孔ノ數モ二三ニ止マリ其吐出量モ少ナクシテ僅ニ湯氣ノ上昇ニ比スベキ程ニ過ギザリシガ、本年始ヨリ漸ク活動ノ勢ヲ増シ噴孔ノ數、噴氣ノ量共ニ増大セルノ傾ヲ呈シ遂ニ初夏ノ交ヨリ二三噴孔ニハ常ニ轟々ノ響アルヲ聽クニ至レリ、爾來小破裂新噴口ノ現出等數々起リテ狀勢雷ナラザリシガ、八月二十四日午後十一時半頃ニ至リテ轟然タル響ト共ニ火焰ノ昇騰スルヲ認メタリ、此噴孔ハ沼之平ノ中央ヨリ少コシク西南ニ偏シテ存在シ常時ニアリテ噴煙較優勢ナルモノナリキ、而シテ噴孔ノ周圍ニハ略純粹ナル硫黃ノ昇華堆積シテ圓錐形ノ小丘ヲナセルアリ其高サ一間餘底部ニ於ケル徑三間餘アリキ、前記ノ火焰ハ専ラ此硫黃ノ燃燒ニ基クモノニシテ強熱ニ遇ヒテ引火スルニ至リシモノナリ